

葛の葉狐

楠山正雄

青空文庫

むかし、撰津国の阿倍野という所に、阿倍の保名という侍が住んでおりました。この人の何代か前の先祖は阿倍の仲麻呂という名高い学者で、シナへ渡つて、向こうの学者たちの中に交つてもちつとも引けをとらなかつた人です。それでシナの天子さまが日本へ還すことを惜しがつて、むりやり引き止めたため、日本へ帰ることができないで、そのまま向こうで、一生暮らしてしまいました。仲麻呂が死んでからは、日本に残つた子孫も代々田舎にうずもれて、田舎侍になつてしまいました。仲麻呂の代から伝えられた天文や数学のむずかしい書物だけは家に残つていますが、だれもそれを読むものがないので、もう何百年という間、古い箱の中にしまい込まれたまま、虫の食うにまかしてありました。保名はそれを残念なことに思つて、どうかして先祖の仲麻呂のような学者になつて、阿倍の家を興したいと思いましたが、子供の時から馬に乗つたり弓を射たりすることはよくできても、学問で身を立てることは思いもよらないので、せめてりっぱな子供を生んで、その子を先祖に負けないらしい学者に仕立てたいと思ひ立ちました。

そこで、ついお隣の和泉国の信田の森の明神のお社に月詣りをして、どうぞりつぱな子供を一人お授け下さいましと、熱心にお祈りをしていました。

ある年の秋の半ばのことでした。保名は五六人の家来を連れて、信田の明神の参詣に出かけました。いつものとおりお祈りをすましてしましますと、折からはぎやすきの咲き乱れた秋の野の美しい景色をながめながら、保名主従はしばらくそこに休んで、幕張りの中でお酒盛りをはじめました。

そのうちだんだん日が傾きかけて、短い秋の日は暮れそうになりました。保名主従はそろそろ帰り支度をはじめますと、ふと向こうの森の奥で大ぜいわいわいさわぐ声がありました。その中には太鼓だのほら貝だのの音も交つて、まるで戦争のようなさわぎが、だんだんとこちらの方に近づいて来ました。主従は何事がはじまったのかと思つて思わず立ちかけますと、その時すぐ前の草叢の中で、「こんこん。」と悲しそうに鳴く声が聞こえました。そして若い牝狐が一匹、中から風のように飛んで来ました。「おや。」という間もなく、狐は保名の幕の中に飛び込んで来ました。それは人に追われて逃げ場を失った狐が、ほかの慈悲深い人間の助けを求めているのだということはずぐ分かり

ました。保名は情け深い侍でしたから、かわいそうに思つて、家来にかつがせた箱の中に狐を入れて、かくまつてやりました。すると間もなく、「うおつうおつ。」というやかましい鬨の声を上げて、何十人とな侍が、森の中から駆け出して来ました。そしていきなり保名の幕の中にばらばらと飛び込んで来て、物もいわずにそこらを探し回りました。この乱暴なしわざを見て、保名はかつと腹を立てて、

「あなたはだれです。断りもなく、出し抜けに人の幕の中に入つて来るのは、乱暴ではありませんか。」

ととがめました。

「生意氣をいうな。我々がせつかく見つけた狐が、この幕の中に逃げ込んだから探すのだ。早く狐を出せ。」

とその中の頭分らしい侍がいました。それから一言三言いい合つたと思うと、乱暴な侍共はいきなり刀を抜いて切つてかかりました。保名も家来たちもみんな強い侍でしたから、負けずに防ぎ戦つて、とうとう乱暴な侍共を残らず追い払つてしまいました。そして箱の中にかくしておいた狐をさつそく出して、その間に逃がしてやりました。狐はまるで人間が手を合わせて拝むような形をして、二三度拝んだと思うと、

さもうれしそうにしつぽを振つて、草叢の中へ逃げて行つてしまいました。

狐の姿が見えなくなつたと思うと、また向こうの森の中で、先よりも三倍も四倍もさわがしい人声がありました。保名が驚いて振り返つて見るひまもなく、すぐ目の前に一人、りつぽな馬に乗つた大將らしい侍を先に立てて、こんどは何百人という侍が、一塊になつて寄せて来て、保名主従を取り囲みました。そこで又はげしい戦がはじまりました。保名主従は幾ら強くつても、先刻の働きでずいぶん疲れている上に、百倍もある敵に囲まれていることですから、とても敵いようがありません。保名の家来は残らず討たれて、保名も体中刀傷や矢傷を負つた上に、大ぜいに手足をつかまえられて、虜にされてしまいました。

この馬に乗つた大將は、やはりお隣の河内国に住んでいる石川悪右衛門という侍でした。奥方がこのごろ重い病にかかつて、いろいろの医者に見せても少しも薬の効き目が見えないものですから、ちようど自分のにいさんが芦屋の道満といつて、その時がなだか分名高い学者で、天子様のおそばに仕えて、天文や占いでは日本一の名人といふ評判だつたのを幸い、ある時悪右衛門は道満に頼んで、来て見てもらいますと、奥方の病気はただの薬では治らない、若い牝狐の生き肝を取つてせんじて飲ませる

よりほかにないということでした。そこで信田の森へ大ぜい家来を連れて狐狩りに来たのでした。けれども運悪く、一日森の中を駆け回つても一匹の獲物もありません。すっかりかんしやくをおこしてぶんぶんしながら引き上げようとしますと、ひよつこり、親子三匹の狐が長いすすきの陰にかくれているのを見つけました。大喜びでさつそく大ぜいかかりますと、狐は驚いて、牝牝の狐はどうとう逃げてしまいました。まだ若い小狐が一匹逃げ場を失つて、大ぜいに追われながら、すばやく保名の幕の中まで逃げ込んだのでした。

こうしてせつかく手に入れかけた狐を横合いから取られてしまったのですから、悪右衛門はくやしがつて、やたらに保名を憎みました。そして生け捕つたまま保名を殺してしまおうとしますと、ふいに向こうから、

「もしもし、しばらくお待ちなさい。」

という声が聞こえました。

悪右衛門が驚いて振り返ると、それは同じ河内国の藤井寺というお寺の和尚さんでした。そのお寺は石川の家代々の菩提所で、和尚さんとは平生から大そう懇意な間柄でした。

「これはめずらしい所でお目にかかりました。どういうわけで、その男を殺そうとなさるのです。」

と和尚さんはたずねました。

悪右衛門はそこで、今日の狐狩りの次第をのべて、とうとうおしまいに保名にじやまをされて、くやしうつてくやしうつてたまらないという話をしました。

和尚さんは、静かに話を聞いた後で、

「なるほど、それはお腹の立つのはごもつともです。けれども人の命を取るといのは容易なことではありません。殊に大切な御病人の命を助けようとしておいでの時、ほかの人間の命を取るといのは、仏さまのおぼしめしにもかなわないでしょう。そうすると、せつかく助かる御病人が、かえつて助からなくなるまいものでもない。」

こう和尚さんにいわれると、さすがに傲慢な悪右衛門も、少し勇気がくじけました。和尚さんはここぞと、

「しかし、ただ助けるというのが業腹にお思いなら、こうしましょう。この男を今日から侍をやめさせて、わたしの弟子にして、出家させます。それで堪忍しておやりなさい。」

といいました。

悪右衛門もとうとう和尚さんに言い伏せられて、いったん虜にした保名を放してやりました。

やがて悪右衛門の主従は和尚さんに別れを告げて、また森の中にすっかり姿が見えなくなり、和尚さんは、その時まで、ぼんやり夢をみたように座っていた保名に向かつて、

「さあ、乱暴者どもが行ってしまいました。また見つからないうちに、そつと向こうの道を通つて逃げていらつしやい。わたくしはさつきあなたに助けて頂いた、この森の狐です。御恩は一忘れません。」

こういうが早い、和尚さんはもうまた元の狐の姿になって、しつぽを振りながら、悪右衛門たちが帰つていった方角とは違つた向こうの森の中の道へ入つていきました。それはさも、自分について来いというようでした。保名はいよいよ夢の中で夢を見たような心持ちがしながら、うかうかとその後についていきました。

もう日がとつぷり暮れて、夜になりました。暗い樹の間から、吹けば飛びそうに薄い三日月がきらきらと光って見えていました。保名はいつの間にか狐の行方を見失ってしまつて、心細く思いながら、森の中の道をとぼとぼと歩いて行きました。しばらく行くと、やがて森が尽きて、山と山との間の谷あいのような所へ出ました。体中にうけた傷がずきんずきん痛みますし、もう疲れきつてのどが渴いてたまりませんので、水があるかと思つて谷へずんずん下りていきますと、はるか谷底に一すじ、白い布をのべたような清水が流れていて、月の光がほのかに当たっていました。その光の中にかすかに人らしい姿が見えたので、保名はほつとして、痛む足をひきずりひきずり、岩角をたどつて下りて行きますと、それはこんな寂しい谷あいに似もつかない十六七のかわいらしい少女が、谷川で着物を洗っているのです。少女は保名の姿を見るとびっくりして、危うく踏まえていた岩を踏みはずしそうにしました。それから保名の血だらけになった手足とぼろぼろに裂けた着物と、それに何よりも死人のように青ざめた顔を見ると、思わずあつとさけび声をたてました。保名は気の毒そうに、

「驚いてはいけません。わたしはけつして怪しいものではありません。大ぜいの悪者に

追われて、こんなにけがをしたのです。どうぞ水を一杯飲ませて下さい。のどが渴いて、苦しうってたまりません。」

といいました。

娘はそう聞くと大そう気の毒がつて、谷川の水をしゃくつて、保名に飲ませてやりました。そしてそのみじめらしい様子をづくづくとながめながら、

「まあ、そんな痛々しい御様子では、これからどこへいらつしやろうといつても、途中で歩けなくなるにきまっています。むさくるしい家で、おいやでしょうけれど、ともかくわたくしのうちへいらつして、傷のお手当をなさいます。」

といいました。

保名は大そうよろこんで、娘の後についてその家へ行きました。それは山の陰になった寂しい所で、うちには娘のほかにも人はおりませんでした。この娘は親も兄弟もない、ほんとうの一人ぼっちで、この寂しい森の奥に住んでいたのでした。

その明るく日保名は目が覚めてみると、昨日うけた体の傷が一晩のうちにひどい熱をもつて、はれ上がっていました。体中、もうそれは榨木にかけられたようにぎりぎり痛んで、立つことも座ることもできません。そこで保名は心のうちには気の毒に思いなが

ら、毎日あおむけになつて寝たまま、親切な娘の世話に体をまかしておくほかはありませんでした。

保名の体が元どおりになるにはなかなか手間がかかりました。娘はそれでも、毎日ちつとも飽きずに、親身の兄弟の世話をするように親切に世話をしました。保名の体がすつかりよくなつて、立つて外へ出歩くことができるようになった時分には、もうとうに秋は過ぎて、冬の半ばになりました。森の奥の住まいには、毎日木枯らしが吹いて、木の葉も落ちつくすと、やがて深い雪が森をも谷をもうずめつくすようになりました。保名はそのままいっしょに雪の中にうずめられて、森を出ることができないでいました。そのうち雪がそろそろ解けはじめて、時々森の中に小鳥の声が聞こえるようになって、春が近づいてきました。保名は毎日親切な娘の世話になつているうち、だんだんうちのことを忘れるようになりました。それからまた一年たつて、二度めの春が訪れてくる時分には、保名と娘の間にかわいらしい男の子が一人生まれていました。このごろでは保名はすつかりもとの侍の身分を忘れて、朝早くから日の暮れるまで、家のうしろの小さな畑へ出てはお百姓の仕事をしていました。お上さんの葛の葉は、子供の世話をする合間には、機に向かつて、夫や子供の着物を織つていました。夕方になると、保名が畑から

抜いて来た新しい野菜や、仕事の合間に森で取った小鳥をぶら下げて帰って来ますと、葛の葉は子供を抱いてにつこり笑いながら出て来て、夫を迎えました。

こういう楽しい、平和な月日を送り迎えするうちに、今年の子供がもう七つになりました。それはやはり野面にはぎやすすきの咲き乱れた秋の半ばのことでした。ある日いつものとおり保名は畑に出て、葛の葉は一人寂しく留守居をしていました。お天気がいいので子供も野へとんぼを取りに行つたまま、遊びほおけていつまでも帰って来ませんでした。葛の葉はいつものとおり機に向かつて、とんからりこ、とんからりこ、機を織りながら、少し疲れたので、手を休めて、うつとり庭をながめました。もう薄れかけた秋の夕日の中に、白い菊の花がほのかな香りをたてていました。葛の葉は何となくうるんだ寂しい気持ちになつて、我を忘れてうつかりと魂が抜け出したようになっていました。その時外から、

「かあちゃん、かあちゃん。」

と呼びながら、遊び疲れた子供が駆けて帰って来ました。うつとりしていて、その声にも気がつかなくなつたとみえて、葛の葉が返事をしないので、不思議に思つて子供はそつと庭に入つてみますと、いつものように機に向かつている母親の姿は見えましたが、機を織る手は休めて、機の上につつぶしたまま、うとうとうたた寝をしていました。ふと見る

とその顔は、人間ではなくって、たしかに狐の顔でした。子供はびっくりして、もう一度見直しましたが、やはりまぎれもない狐の顔でした。子供は「きゃつ。」と、思わずけたたましいさけび声を上げたなり、あとをも見ずに外へ駆け出しました。

子供のさけび声に、はっとして葛の葉は目を覚ましました。そしてちよいとうたた寝をした間に、どうということが起こったか、残らず知ってしまいました。ほんとうにこの葛の葉は人間の間でなくって、あの時保名に助けられた若い牝狐だったのです。狐は今日までかくしていた自分の醜い、ほんとうの姿を子供に見られたことを、死ぬほどはずかしくも、悲しくも思いました。

「もうどうしても、このままこうしていることはできない。」

こう葛の葉はいつて、はらはらと涙をこぼしました。

素晴らしいながら、八年の間なれ親しんだ保名にも、子供にも、この住いにも、別れるのがこの上なくつらいことに思われました。さんざん泣いたあとで、葛の葉は立ち上がって、その障子の上に、

「恋しくば

たずね来てみよ、

和泉なる

しのだの森の

うらみ葛の葉。

とこう書いて、またしばらく泣きくずれました。そしてやっと思いきって立ち上がると、またなごり惜しそうに振り返り、振り返り、さんざん手間をとった後で、ふいとどこかへ出ていつてしまいました。

もう日が暮れかけていました。保名は子供を連れて畑から帰って来ました。母親の変った姿を見てびっくりした子供は、泣きながら方々父親のいる所を探し歩いて、やっと見つけると、今し方見たふしぎを父親に話したのです。保名は驚いて、子供を連れて、あわてて帰って来てみると、とんからりこ、とんからりこ、いつもの機の音が聞こえないで、うちの中はひっそりと、静まり返っていました。うち中たずね回っても、裏から表へと探し回っても、もうどこにも葛の葉の姿は見えませんでした。そしてもう暮れ方の薄明りの中に、くつきり白く浮き出している障子の上に、よく見ると、字が書いてありました。

「恋しくば

たずね来てみよ、

和泉なる

しのだの森の

うらみ葛の葉。

母親がほんとうにいなくなったことを知って、子供はどんなに悲しんだでしょう。

「かあちゃん、かあちゃん、どこへ行ったの。もうけっして悪いことはしませんから、早く帰って来て下さい。」

こういいながら、子供はいつまでもやみの中を探し回っていました。さつき顔の変わったのに驚いて声を立てたので、母親がおこって行ってしまったのだと思つて、よけい悲しくなりました。狐のかあさんでも、化け物のかあさんでもかまわない、どうしてもかあさんに会いたいといつて、子供はききませんでした。

あんまり子供が泣くので、保名は困つて、子供の手を引いて、当てどもなく真つ暗やみの森の中を探して歩きました。とうとう信田の森まで来ると、とうに夜中を過ぎていました。けっして二度と姿を見せまいと心に誓つていた葛の葉も、子供の泣き声にひかれて、もう一度草むらの中に姿を現しました。子供はよろこんで、あわてて取りすがろうとしま

したが、いったん元の狐に返った葛の葉は、もう元の人間の女ではありませんでした。

「わたしの体にさわってははいけません。いったん元の住みかに帰っては、人間との縁は切れてしまったのです。」

と葛の葉狐はいいました。

「お前が狐であろうと何であろうと、子供のためにも、せめてこの子が十になるまででも、元のようにいつしよにいてくれないか。」

と保名はいいました。

「十まではおろか、一生でも、この子のそばにいたいのですけれど、わたしはもう二度と人間の世界に帰ることのできない身になりました。これを形見に残しておきますから、いつまでもわたしを忘れずにいて下さい。」

こういつて葛の葉狐は一寸四方ぐらいの金の箱と、水晶のような透き通った白い玉を保名に渡しました。

「この箱の中に入っているのは、竜宮のふしぎな護符です。これを持っていれば、天地のことも人間のことも残らず目に見るように知ることができます。それからこの玉を耳に当てれば、鳥獣の言葉でも、草木や石ころの言葉でも、手に取るように分かり

ます。この二つの宝物を子供にやって、日本一の賢い人にして下さい。」
 といって、二つの品物を保名に渡しますと、そのままうつと狐の姿はやみの中に消えてしまいました。

三

狐のふしぎな宝物を授かったせいでしょうか、狐の子供の阿倍の童子は、並の子供と違って、生まれつき大そう賢くて、八つになると、ずんずんむずかしい本を読みはじめ、阿倍の家に昔から伝わって、だれも読む者のなかつた天文、数学の巻き物から、占いや医学の本まで、何ということなしにみな読んでしまつて、もう十三の年には、日本中でだれもかなうもののないほどの学者になつてしまいました。

するとある日のことでした。童子はいつものとおりに一間に入つて、天文の本をしきりに読んでいますと、すぐ前の庭の柿の木に、からすが二羽、かあかあいつて飛んで来ました。そして何かがちやがちやおしやべりをはじめました。何をからすはいっているのか知らんと思つて、童子は例のふしぎな玉を耳に当てますと、このからすは東の方から来た関

東のからすと、西の方から来た京都のからすでした。京都のからすは関東のからすに向かつて、このごろ都で見て来た話をしました。

「都の御所では、天子さまが大病で、大そうなさわぎをしているよ。お医者というお医者、行者という行者を集めて、いろいろ手をつくして療治をしたり、祈禱をしたりしているが、一向にしろしが見えない。それはそのはずさ、あれは病気ではな
いんだからなあ。だがわたしは知っている。」

「じゃあどういうわけなんだね。」

と関東のからすはたずねました。

「それはこういうわけさ。このごろ御所の建て替えをやつて、天子さまのお休みになる御殿の柱を立てた時に、大工がそつつかしく、東北の隅の柱の下に蛇と蛙を生き埋めにし
てしまったのだ。それが土台石の下で、今だに生きていて、夜も昼もにらみ合つて戦つ
ている。蛇と蛙がおこつて吹き出す息が炎になつて、空まで立ちのぼると、こんどは天が
乱れる。その勢いで天子さまの体にお病がおこるのだ。だからあの蛇と蛙を追い出してし
まわないうちは、御病気は治りっこないのだよ。」

「ふん、それじゃあ人間になんか分らないはずだなあ。」

そこで京都のからすは、関東のからすと顔を見合わせて、あぎけるように、かあかあと笑いました。そしてまた関東のからすは東へ、京都のからすは西へ、別れて飛んでいってしまいました。

からの言葉聞いて、童子は早速占いを立ててみると、なるほどからのいったとおりに違いありませんでしたから、おとうさんの前へ出て、その話をして、「どうか、わたしを京都へ連れて行って下さい。天子さまの御病気を治してあげようございます。」

といいました。

保名もこれをしおに京都へ行つて、阿倍の家を興す時が来たとき、大それた童子を連れて京都へ上りました。そして天子さまの御所に上がつて、お願いの筋を申し上げました。天子さまも阿倍の仲麻呂の子孫だということをお聞きになつて、およろこびになり、保名親子の願いをお聞き届けになりました。そこで童子はからすに聞いたとおり占いを立てて申し上げました。御所の役人たちはふしぎに思つて、なかなか信用しませんでした。何しろ困りきつているところでしたから、ために御寝所の東北の柱の下を掘らしてみますと、なるほど童子のいったとおり、火のような息をはきかけはきか

たか
け戦つてゐる蛇と蛙を見つけて、追い出して、捨てました。するとまもなく天子さまの御
びようき
病氣は薄紙をへぐように、きれいに治つてしまいました。

てんし
天子さまは大そう阿倍の童子の手柄をおほめになつて、ちようど三月の清明の季節な
ので、名前を阿倍の清明とおつけになり、五位の位を授けて、陰陽頭という役に
おとりたてになりました。後に清明の清の字をかえて、阿倍の清明といった名高い占
いの名人はこの童子のことです。

四

たつた十三にしかならない阿倍の童子が、天子さまの御病氣を治してえらい役人に
とりたてられたと聞いて、いちばんくやしがつたのは、あの石川悪右衛門のいさんの
あしや
芦屋の道満でした。道満はその時まで日本一の学者で、天文と占いの名人と
いう評判でしたが、こんどは天子さまの御病氣を治すことができないで、その手柄
を子供に取られてしまったのですから、くやしがるのも無理はありません。そこで御所へ
あ
上がつて天子さまに讒言をしました。

「御用心遊ばさないといいけません。あの童子は詐欺師でございます。恐れながら、陛下のお病は侍医の方々や、わたくし共の丹誠で、もうそろそろ御平癒になる時になっておりました。そこへ折よく童子めが来合わせて、横合いから手柄を奪っていったのでございませぬ。御寝所の下の蛇と蛙のふしぎも、あれら親子が御所の役人のだれかとしめし合せて、わざわざ入れて置いたものかも知れません。どうか軽々しくお信じなさらずに、一度わたくしと法術比べをさせて頂きとうございます。もしあの童子が負けましたらば、それこそ詐欺師の証拠でございますから、さつそく位を取り上げて、追いつ返して頂

きとうございませぬ。」
と申し上げました。

「でもお前がもし童子に負けたらどうするか。」

と天子さまは少しおこつて、おたずねになりました。

「はい、万々一わたくしが負けるようなことがございましたら、それこそわたくしの頂いておりますお役も位も残らずお返し申し上げて、わたくしは童子の弟子になつて、修業をいたします。」

と、高慢な顔をしてお答え申し上げました。

そこで天子さまは阿倍の晴明親子をお呼び出しになり、御前で術比べさせてごらんになることになりました。道満と晴明が右左に別れて席につきますと、やがて役人が四五人かかって、重そうに大きな長持を担いで来て、そこへすえました。

「道満、晴明、この長持の中には何が入っているか、当ててみよ、という陛下の仰せです。」

とお役人の頭が良かったです。

すると道満は、さもとくいらしい顔をして、

「晴明、まずお前からいうがいい。子供のことだ、先を譲ってやる。」

といいました。晴明はその時、丁寧に頭を下げて、

「では失礼ですが、わたくしから申し上げましょう。長持の中にお入れになったのは

猫二匹です。」

といいました。

晴明がうまくいいあてたので、道満はぎよつとしました。

「ふん、まぐれ当たりやに当たったな。いかにも二匹の猫に相違ありません。それで一匹は赤猫、一匹は白猫です。」

長持ながもちのふたをあけると、なるほど赤あかと白しろの猫ねこが二匹ひきと飛び出だしました。天子てんしさまも役やくに人らんたちも舌したをまいて驚おどろきました。

今いまのは勝しょうぶ負ふなしにすんだので、又また、四五人にんのお役やくにん人らんが、大きなお三方さんぼうに何か載のせて、その上に厚あつい布ぬのをかけて運はこんで来きました。道満どうまんはそれを見みると、こんどこそ晴明せいめいに先せんをこされまいというので、いきり立たつて、

「ではわたくしから申もうし上げます。お三方さんぼうの上うへにお載のせになったのは、みかん十五じゅうごです。」

といいました。

晴明せいめいはそれを聞きいて、「ふん。」と心こころの中であざ笑わらいました。そして少すこしいたずらをして、高慢こうまんらしい道満どうまんの鼻はなをあかせてやりたいと思おもいました。そこでそつと物ものを換かえる術じゆつつかを使って、お三方さんぼうの中の品物しなものを素早すばやく換かえてしまいました。そしてすました顔かおをしながら、

「これはみかん十五じゅうごではございません。ねずみ十五匹ひきをお入れになつたと存ぞんじます。」
といいました。天子てんしさまはじめお役やくにん人らんたちはびっくりしました。こんどこそは晴明せいめいがしくじつたと思おもいました。そばについていたおとうさんの保名やすなも真まつ青さおになつて、息子むすこ

のそでを引きました。けれども晴明はあくまで平気な顔をしていました。道満は真つ赤かになつて、

「さあ、詐欺師さぎしの証拠しょうこは現あらわれましたぞ。中なを早くおあけなさい、早く。」
とさげびました。

お役人やくにんはお三方さんぼうの覆おおいをとりました。するとどうでしょう。お三方さんぼうの上に載のせたのはみかんではなくつて、今いまの今いままで晴明せいめいのほかだれ一人ひとり思おもいもかけなかつたねずみが十五匹ひき、ちよろちよろ飛び出だして、御殿ごてんの床ゆかの上かを駆け歩あるきました。すると長持ながもちの上かに寝ねていた二匹ひきの猫ねこが目早めはやく見みつけて、いきなり飛び下おりて、ねずみを追おい回まわしました。みんなは「あれあれ。」とさげんで、総立そうだちになつて、やがて御殿中ごてんじゆうの大おおさわぎになりました。

これで勝負しょうぶはつきました。芦屋あしやの道満どうまんは位くらいを取り上げられて、御殿ごてんから追おいだされました。そして阿倍あべの晴明せいめいのお弟子でしになりました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

葛の葉狐

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>